

# 教材についての考え方

## －本会がこれまでつみあげてきたこと－

竹中 輝夫

1

一月から四月にかけて、わたくしは本会の研究の歩みをまとめる仕事をした。本会の著として出版を予定されている本の原稿であったが、忙しい中に十年間の成果を未熟な頭でまとめるということは、たいへん苦しいことであった。未熟なまとめであるばかりでなく、いささか主観的になったであろうことを思うと、今になお本会の皆さんにはあいすまぬことだと心が痛む。しかしわたくしじしんにとっては十年間の『考える子ども』を続かえさずにはおれない立場に追いやられ、それがたいへん有意義であった。

十年の研究の歩みをたどりながら、わたくしはつくづく、よくぞこのようにしつように、注入主義からの脱却を探究してきたことよという感じで胸がいっぱいになった。毎年の研究主題はいろいろにちがう。しかし、一貫して注入主義への抵抗を考えつづけてきた。暗記とつめこみのいわゆる知識主義が、怒涛のようにさか巻く時流に抗して、歩いてきた本会の人びとの地道な苦汁を今さらながらわたくしは立派だと思ふ。とともに、この十年間にえられた成果、それはたとえささやかなものであったとしても、みんなでたいせつにし、それを足場にしながらいつその前進を期したいものだと痛感した。

今年もまた、「子どもの問題追求と教材」という研究主題で集会がもたれようとしている。わたくしはこの欄を借りて、この主題と密接に関係のあることがらを、これまでにわたくしたちが確認しあってきたといえるであろうことがらの中からいくつか拾い出しておきたいと思う。(はじめに記したようにわたくしなりのはなはだ未熟なまとめであり、しかも限られたスペースのゆえに多くは記せないことをおゆるしいただきたい。)

2

一九六二年(昭和三十七年)に本会は「社会科指導と教材研究」という主題で研究をした。そしてほぼ次のようなことがらが確認されている。

(1)教材研究という名において、もっとも広くおこなわれている仕事は、資料研究だといえよう。しかし、学習というものの性格からみて、教師がいわゆる資料の内容理解という仕事をするだけでは、はたしてその内容が児童・生徒の主体の中に、どのように定着し

- ていくか、そもそも定着しうるものかどうかの保証はない。
- (2)教材は教師がそれを駆使して、子どもを思うぞんぶん活動させ、目標を実現することに役立てるものであって、たんにそれを教えこんだり、与えたりするだけのためにあるものではない。
  - (3)子どもは教材について白紙の状態であると考えてはならない。自分が経験し、知っていることがらを足場として、また、それをつなぎあわせていく中に、新しい知識（教材）を組み入れ、また、新しい知識（教材）を求めていくのだということを、教師は明確にとらえておくべきである。
  - (4)したがって、教材の系統性を学問の既成の系統とを、すぐ同一視してしまうことは望ましくない。教材の系統性は、学問をにない創り出して行く主体（子ども）の思考（追求）を発展させるということを中心にして、それとの関連の中に見出すべきものである。
  - (5)教材は、その中に、子どもにとっても、教師にとっても、なっとくしがたい点（疑問）、こだわらざるをえない点を含んでいる場合に、有効なはたらきをすることに注目したい。
  - (6)また、教材が子どもたちの思考を一つそう深まらせ、子どもたちに新しい視点を発見させ、かつ、子どもたちの視野を拡大させるための拠点（あしば）、軸、つなぎなどとしてのはたらきを発揮した場合には、有効な学習を展開することができる。
  - (7)そして、教師の教材研究として最低必要なことは、教師じしんがいつも、社会事象の中で重要と思われることについて、たえず関心を持ちつづけることだということをたいせつに考えたい。それは教師をその事象に関する学説についての再発見学習という行為にみちびくことになる。そしてそのような態度（行為）がなければ、子どもたちにたえず新しい社会を発見させ、子どもたちじしんの思考を高め、より深い社会の実態をつかませるといようなことはできない。

### 3

一九六五年（昭和四十年）の集会は、「指導計画のたて方」という主題で研究を進めたが、この集会でも、「子どもの社会認識と社会科学の成果のかかわりあい」といったことから、次のような点が指摘されている。

- (1)指導計画の立案にあたっては、子どもたちが社会というものについて自分なりに把握している方法や成果を、たいせつにしながら、それと、教師や学者その他が科学し把握しているものとを批判的に対決させていかせるという基本的な考え方が必要である。
- (2)これまでの会でも、しばしば、「つまづきに当面させる」「つまづかせる」といった発言がなされてきた。わたくしたちは子どもたちに社会科学の成果を与えるという立場でなく、子どもたちじしんの社会認識のプロセスを中心にして、そのプロセスの中に、社会科学の方法を適用させうるような場面（問題事態）を再構成し、科学の成果を登場させ

るという立場を重視し、くふうしていきたい。

(3) 次のような特性をもった事実が教材として望ましい。

(重松鷹泰氏提案)

- ・内部的に緊密な関連を待ち、輪郭がはっきりしている。
- ・他の諸事実と結びつき、ある事態の中核的位置を占めている。
- ・内部に鋭い矛盾を含み、変形し発展していく必然性を持っている。

**(和歌山・和歌山市立宮北小学校)**

(『考える子ども』一九六九年七月号より)

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』No.273, 2002年5月号, pp.95-97)